

4. 研究開発の進捗状況—目標の進捗状況分析

4.1 生徒の変容—SGH 生徒アンケート分析

アンケート回答数 n=346 (前年 n=308)

4年 n=112 (在籍 114人)、5年 n=126 (在籍 130人)、6年 n=108 (在籍 135人)

※nは回収時欠席者等を除く件数である。

特徴的傾向

・外国語学習への意識向上

英検1級取得(保持)者 102名/回答総数 342件中

英検準1級取得(保持)者 119名/回答総数 342件中

・海外大学(大学院)への進学希望者増(単純数値比較: 45件→72件 前年比 60%増)

今年度も昨年度に引き続き3学期に後期課程の生徒を対象としたアンケートを実施した。

内容は昨年度のものの一部改訂するとともに、4年生・5年生については学校全体で使用しているクラウドウェア Office365 (マイクロソフト) のアプリケーション「Forms」を使って web 上で回答を回収した。回答回収の都合上、今年度の表については原則として4年生～6年生の数値を合計したものを、前年度までの2か年分と比較して示すこととする。

【1】取得した英語検定の級

過去2年分(4年～6年)	3級以下	準2級	2級	準1級	1級
平成27年度	9	59	100	62	55
平成28年度	13	58	85	64	60

(今年度は4年生と5年生には今年度取得したものとこれまで取得したものを分けて問うた)

平成29年度	3級以下	準2級	2級	準1級	1級
6年(今年度を含めこれまで)	37	45	49	35	31
4年・5年(今年度)	2	5	21	19	25
4年・5年(これまで)	60	76	99	66	46
総数	99	125	169	120	102

<分析>

・1級取得保持者「102」名は過去最大。回答者の約3割。つまり後期課程の3人に1人は英検1級を取得済みである。昨年度に比較して回答者数が増加したことによって増えている部分もあるが、今年度取得した生徒が4年・5年だけでも25名はいる。年次を追って高いレベルの級を取得している生徒が増加傾向にある。

【2】英検以外での外国語資格受験・取得状況(29年度分)

	TOEFL	TOEIC	国連英検	IELTS	TEAP	仏検
平成27年度	48	40	1	4	0	6
平成28年度	44	32	11	3	0	13
平成29年度	66	48	8	9	2	28

	尼検	西検	伊検	中検/HSK	TOPIK (韓国語能力試験)	JLPT (日本語能力試験)
平成 27 年度	1	2	1	2/3	1	
平成 28 年度	1	0	0	0/4	0	1
平成 29 年度	0	1	1	5 (合算)	2	1
	独検/DAF	露検	伊検	DELTA	ELF B/Junior	
平成 27 年度	3/2	1	0		1	
平成 28 年度	8/0	0	0		1	
平成 29 年度	3/0	0	1	1		

以下に英語の資格取得者の内、最も高いスコアと級を示す。

- ・ TOEFL IBT 最高点=118
- ・ TOEIC 最高点=990 (=満点)
- ・ 国連英検 取得級の内最も高いもの=特 A 級
- ・ IELTS 最高点=8.5

<分析>

・ TOEFL/TOEIC の受験者数が増加しているのは、回答数の増加によるところもある。しかし後掲の海外への渡航意志調査と関連させてみると、次年度までに比して海外進学や留学への志向をもった生徒が英検以外の資格試験に挑戦しようとしている傾向も見て取れる。今年度新たな回答の特徴として見えるのは TEAP 受検者が少数ではあるが見えることと仏検受検者が倍増したことである。英語以外の外国語学習への意欲の高まりが見える。

【3】今年度における海外への渡航経験

	旅行	留学・研修 (1 か月以下)	留学・研修 (3 か月以下)	留学・研修 (1 年以下)	ボランティア	調査・研究	国際大会参加	その他 (進路関係)	ワークキャンプ
平成 27 年度	97	31	0	26 (+留学中 13)	7	9	1		126
平成 28 年度	91	64 (+留学中 16)			8	8	0		130
平成 29 年度	97	69 (+留学中 8)			3	10	10	17	

<分析>

・今年度における海外渡航経験は昨年度に比して増えている。留学・研修の数はあまり変わらないが、継続的に 70 人強の留学・研修による渡航者がいる。国際大会への参加や大学進学を念頭においた大学見学などに出かけた生徒はかなり増えている。海外志向の高まりが見える。

【4】今年度の活動を経て海外に行きたいと思うようになったか（目的別）（複数回答可）

	旅行	短期留学	1年以上の留学	海外進学 (大学院を含む)	海外で働く	いいえ
平成 27 年度	186	88	85	28	77	45
平成 28 年度	171	107	82	45	77	82
平成 29 年度	215	143	95	72	105	40

＜分析＞

- ・海外進学を目的とした渡航意志=105名という数字は、英検の取得保持率の向上と相関があると思われる。
- ・短期留学や海外進学、海外での就労を望む傾向が強まる一方で、「いいえ」の回答は半減している。
- ・全体的傾向としてこれまでに比して海外への全体的な志向は強まっていると考えられる。

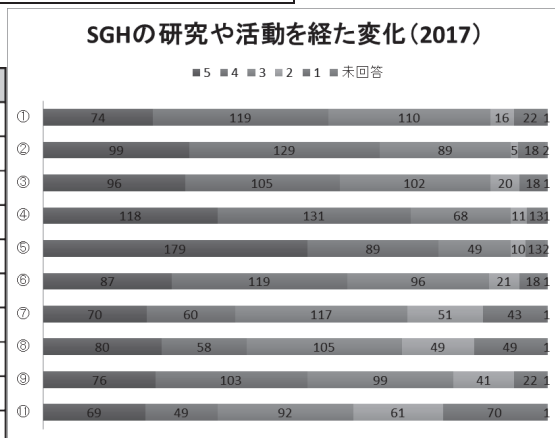
【5】SGHの研究や活動を行って変化したこと

- ①国内のニュースに興味を持つようになった。
- ②国際的なニュースに興味を持つようになった。
- ③日本のことをもっと知りたくなった。
- ④世界のことをもっと知りたくなった。
- ⑤外国語の勉強を頑張ろうと思った。
- ⑥教科の学習と世界の出来事をつなげて考えるようになった。
- ⑦将来の夢が具体的になった。
- ⑧学校外での活動が増えた。
- ⑨学んだことや感じたことを友達と議論した。
- ⑩学んだことや感じたことを新聞などに投稿した。=29年度は問わず
- ⑪SGHがきっかけとなって何か新しいことを始めた。

※各項目を5段階で評価：5=強く思う 3=普通 1=全く思わない

＜平成 29 年度＞(n=342)

	5	4	3	2	1	未回答
①	74	119	110	16	22	1
②	99	129	89	5	18	2
③	96	105	102	20	18	1
④	118	131	68	11	13	1
⑤	179	89	49	10	13	2
⑥	87	119	96	21	18	1
⑦	70	60	117	51	43	1
⑧	80	58	105	49	49	1
⑨	76	103	99	41	22	1
⑪	69	49	92	61	70	1



<平成 27 年度>

<平成 28 年度> (n=308)

	5	4	3	2	1	未回答		5	4	3	2	1	未回答
①	87	105	98	7	15	1	①	87	98	101	7	13	2
②	107	104	79	5	17	1	②	109	98	78	8	13	2
③	83	104	98	10	17	1	③	90	94	97	15	10	2
④	113	112	67	3	17	1	④	109	91	88	8	10	2
⑤	138	96	58	6	14	1	⑤	133	94	60	11	9	1
⑥	59	97	118	20	18	1	⑥	70	77	122	18	19	2
⑦	78	61	105	35	33	1	⑦	71	68	101	38	29	1
⑧	53	68	108	43	39	2	⑧	72	52	102	38	43	1
⑨	55	86	102	41	27	2	⑨	67	78	100	33	28	2
⑩	34	32	86	43	117	1	⑩	31	24	82	45	124	2
⑪	41	30	91	50	98	3	⑪	40	37	85	39	106	1

<分析>

- ・①・②の項目における「5強くそう思う」の回答数の減少は、過去 2 カ年に比して「課題意識」「社会的話題への関心」がやや弱化傾向にあるかとも思われる。
- ・一方で⑤・⑧・⑪の項目の「5強くそう思う」の回答数の増加は、SGH の研究や活動を経て自分がどのように成長するかや自分がどのような行動をすべきか・研究のために何をするかということに関心が向いたことを示している。
- ・⑦の数値が微減しているのは、むしろ研究などを通して自分の適性や将来について悩むようになった生徒も増えている可能性を示す。

【6】SGH の 3 つの大テーマのうち今後世界の諸問題と向き合うために強く意識すべきものはどれだと思うか。(複数回答可)

	1 リスク	2 葛藤と軋轢	3 教育
28 年度 n=308	74	105	122
29 年度 n=346	112	162	152

<分析>

- ・昨年度は「教育」を選んでいる生徒がもっとも多かったが、今年度は「葛藤と軋轢」が最も多い結果となった。また「リスク」も昨年度よりも増えている。
- ・課題研究のテーマを設定する際に、世界の諸問題が「教育」によって解決できるのではないかと安易に考える傾向が一部にあったが、その傾向が多少弱まり、現在の世界で問題となっていることから（紛争や貧困、環境リスク等）に直接的に目が向きはじめていくということが見て取れる。

【7】課題研究を進めるにあたってどのような教科の学習と最も関連があると思ったか。(複数回答可)

	1 すべて	2 国語	3 数学	4 理科	5 社会	6 英語	7 保健 体育	8 芸術 美術	9 技術 家庭	10 情報	11 国際 教養
28 年度 n=308	43	27	34	48	120	48	27	13	23	21	46
29 年度 n=346	110	74	60	58	153	109	17	35	25	68	88

<分析>

・アンケートの回答数の増加による純増もあるが、増加率の高いものとしては「すべて」「国語」「英語」の回答数が挙げられる。研究を進める上で文献調査を行ったり、論文を作成する際、あるいは外部で発表を行う際に、深い読解力や高い表現力が必要であることを実感していると推測される。

・「すべて」の回答数が多いことは前回同様の傾向だが、幅広い知識や文理両方の理解が求められることは研究を進めるにしたがって実感されるものと考えられる。SGH 事業が3年目を終える今年度においては後期課程の全ての生徒が後期課程の最初から SGH 指定校の生徒として課題研究を行ってきたことになる。そうした経験がより多くの「すべて」の回答を生んでいるものと考えられる。

【8】課題研究を進める上でどのような方法を活用しているか。(複数回答可)

	1 実験	2 アンケート	3 文献調査	4 ディスカッション	5 グループワーク	6 インタビュー	7 外部連携	8 セミナーや研修
28年度 n=308	68	81	165	39	64	74	62	62
29年度 n=346	137	134	253	66	83	141	127	78

<分析>

・文献調査が大きな伸びを示している要因は「研究倫理」のガイダンス・オリエンテーションを2年連続して行ってきたことであろうと推測できる。研究倫理上、先行研究を十分に確認することは必須であり、多くの信頼できるデータは書籍やweb上で公開されている。研究の基礎段階においてそうした情報に拠った生徒が多くいることがうかがえる。

・数値的に倍増しているものとしては「実験」「インタビュー」「外部連携」がある。SSH 分野で研究している生徒も「実験」を多く行っているのだが、SGH 分野でも実験や実作を通して研究を行っている生徒が増えているので全体として増加傾向にある。

・SGH の事業として特に注目したいのは「外部連携」という回答も倍増しているということである。具体的な外部連携の実態については別の章で述べるが、学校の外とつながる学びを生徒が体現し始めていることがこの数値に示されていると言ってよいだろう。

【9】SGH の活動や研究を通して身についたスキル（※IB の ATL スキルとの関わり）

各スキルを5段階で評価

5非常に身についた 4やや身についた 3変化なし 2やや下がった 1非常に下がった 0わからない

28年度 n=308	5	4	3	2	1	0	未回答
①コミュニケーション	66	113	89	6	4	16	14
②協働	68	122	83	5	3	16	11
③整理整頓	54	103	107	12	6	15	11
④情動	45	89	125	8	9	20	12
⑤振り返り	57	121	90	10	4	15	11
⑥情報リテラシー	81	109	85	4	4	13	12
⑦メディアリテラシー	70	114	89	3	5	16	11
⑧批判的思考	78	110	87	4	2	16	11
⑨創造的思考	61	121	91	6	4	14	11
⑩転移	61	98	112	5	6	15	11

29年度 n=346	5	4	3	2	1	0	未回答
①コミュニケーション	85	170	68	2	1	12	4
②協働	96	143	83	6	1	11	2
③整理整頓	75	128	117	7	1	12	2
④情動	55	120	135	11	4	15	2
⑤振り返り	78	163	78	4	4	13	2
⑥情報リテラシー	97	158	69	5	0	11	2
⑦メディアリテラシー	85	148	93	3	1	10	2
⑧批判的思考	95	149	76	10	0	10	2
⑨創造的思考	85	133	107	5	0	10	2
⑩転移	66	154	103	4	1	12	2

<分析>

・各スキルについて、「5非常に身についた」「4 やや身についた」と答えている生徒の割合は次の通り。

①73.6% ②69.1% ③58.7% ④50.1% ⑤69.7% ⑥73.7% ⑦67.3% ⑧70.5% ⑨63.0%
⑩63.6%

もっとも高い比率を示すのは⑥情報リテラシーである。次に①コミュニケーションスキル・⑧批判的思考スキルが続く。前回上位でなかったコミュニケーションスキルが上がっているのは、外部連携の増加やインタビュー調査を使用しての研究遂行が増加傾向にあることと相関があると推測される。

また、前年度比で数値の伸びを示しているものとして⑩転移スキルがある（前年度比約10%増）。転移スキルは、別の分野での身に付けたスキルや教科学習の学習成果を「転移・応用」できる能力をいう。課題研究を進める上で「これは歴史で勉強した」「統計の読み方は前期の時にやった」などの声が聞かれることもしばしばあり、そうした生徒の声とこうした結果が符合していることがわかる。

これらのスキルの獲得については教員側にもアンケート調査を行っている。その結果を次に示す。各スキルを5段階で評価。

5非常に身についた 4やや身についた 3変化なし 2やや下がった 1非常に下がった 0 わからない

28年度 教員 n=46	5	4	3	2	1	0
①コミュニケーション	10	34	1	0	0	0
②協働	6	35	4	0	0	0
③整理整頓	4	31	9	0	0	1
④情動	1	18	23	0	0	3
⑤振り返り	8	33	3	0	0	1
⑥情報リテラシー	12	31	2	0	0	0
⑦メディアリテラシー	11	32	2	0	0	0
⑧批判的思考	11	29	4	0	0	0
⑨創造的思考	10	34	1	0	0	0
⑩転移	3	35	6	0	0	2

29年度 教員 n=51	5	4	3	2	1	0
①コミュニケーション	15	29	6	0	0	1
②協働	16	29	4	0	0	2
③整理整頓	9	29	11	0	0	2
④情動	4	23	21	0	0	3
⑤振り返り	12	30	8	0	0	1
⑥情報リテラシー	14	31	5	0	0	1
⑦メディアリテラシー	13	32	4	0	0	2
⑧批判的思考	10	36	3	0	0	1
⑨創造的思考	9	36	5	0	0	1
⑩転移	6	34	10	0	0	1

<分析>

- *教員の異動などの影響で前年度と比べて「分からない」という回答が微増している。
- ・教員の全体的な回答の傾向に変化はない。①コミュニケーションスキル・②協働スキル・⑤振り返りスキルに高い評価への変動が多少見られるが、生徒の自覚と大きな差異はない。ただし、⑩「転移スキル」については生徒の自覚よりも低い評価傾向が見られる。教員の目からみると「転移・応用」する力の向上については更に努力の余地があるということになる。

4.2 ISS チャレンジによる生徒の変容

ISS チャレンジでは、生徒課題研究の「研究実施計画書」（提出：5月）「研究経過報告書」（同10月）「研究論文」（同1月）「フィールドノート」（同1月）に対して、教員がルーブリックを用いて観点別評価を行う。これは、ISS チャレンジが課題研究の校内コンペティションでありその選抜に用いるためでもあるが、それ以上に、研究のプロセスを適切に評価することで生徒の成長を意図したものである。同様の趣旨から、生徒自身にも5月と1月に自己評価を行わせ、9月には外部評価会を設けている。これらの評価はすべて数値で表現されるとともに文章でも表現される。今年度 ISS チャレンジで SGH 課題研究を一年間継続した 46 チームに対する評価結果（巻末の ISS チャレンジ資料「教員による評価委の推移」参照）を分析し、以下のような考察を得た。これらは課題研究を指導していく際の「ツボ」であると考えられるので、次年度以降の指導に生かすと共に、経年的にデータを取り続けて行く。

- ・最優秀／優秀チームは計画書段階での「研究目的」「先行研究」評価が高い。
- ・最優秀／優秀チームは経過報告書段階での「分析・考察」「外部連携」評価が高い。
- ・最優秀／優秀チームは最終論文での「メタ認知力」「調査方法・内容」評価が高い。
- ・評価上昇チームは経過報告書段階での「メタ認知力」「外部連携」評価が高い。
- ・評価下降チームは経過報告書、フィールドノートでの「外部連携」評価が極度に低い。
- ・継続研究の大部分は「研究目的」が明確であり、研究への「メタ認知」力も高い。そのため成果が上がりやすい。

〈分析1〉セミファイナリスト以上とそれ以外の比較

今年度の ISS チャレンジでは、最終的にファイナリスト（最優秀賞）4チームとファイナリスト（優秀賞）14チームを選抜した。教員によるルーブリック評価について、この18チームとそれ以外の30チームとを「研究計画書」段階と「研究経過報告書」段階で比較したのが下図【1】である。最終的に成果を出した研究は、計画書段階から全ての観点において優位にあることが分かるが、特に計画書での「A 研究目的の明確さ」「B 先行研究の調査」は高い値を示している。また、経過報告書では「②分析・考察」「④外部連携」がきわだって高い。研究序盤や途中プロセスにおいてこれらの要素が重要であることが分かる。

【1】セミファイナリスト以上とそれ以外の比較（研究計画書・研究経過報告書段階）

観点	研究計画書（5月）						研究経過報告書（10月）					
	A 研究目的	B 先行研究	C 研究方法	D 実現可能性	E 内容妥当性	合計	①メタ認知	②分析・考察	③研究遂行	④外部連携	⑤調査	合計
最高水準	6	6	6	6	6	30	6	6	6	6	6	30
優秀者	4.78	4.11	3.89	4.00	3.72	20.50	4.83	4.44	4.22	4.56	4.39	22.44
それ以外	3.39	2.93	2.75	2.89	3.14	16.14	3.36	2.71	3.29	2.64	3.14	15.14

【2】は「最終論文」と「フィールドノート」段階の評価の比較である。「最終論文」はやはりセミファイナリスト以上のチームは全般的に高い値を示すが、特に「A 要旨」「B 研究意義」が高評価であることと、「C 調査方法・内容」のポイントがそれ以外のチームとの差が大きいことが目を引く。優秀な研究は自らの研究を俯瞰的に捉えており、研究の意義を明確に意識していることが必要だが、加えて高校の課題研究のレベルでは、調査を科学的手法に則って客観的に行っているかが成否を分ける鍵の一つであることが分かる。なおここには表れてこないが、複数年度にわたる継続研究は今年度14チームあり、うち11チームがセミファイナリスト以上に残った。この11チームは計画書

段階での「A 研究目的の明確さ」「B 先行研究の調査」がきわめて高く、自分たちの研究のオリジナリティを見据えながら順調に探究を進めた様子が伺われる。逆に継続研究でありながら成果を出せなかった 5 年女子生徒は「自分の研究の課題は見えていたがどうやって突破すればよいのかわからなかった。その結果、前年度までの研究をなぞるだけで終わってしまった」と述べている。このようなケースを見ると、継続研究に対しては 1 学期の早い段階で外部評価会のような機会を与える必要があるかもしれない。次年度への課題としたい。

【2】セミファイナリスト以上とそれ以外の比較（最終論文・フィールドノート）

観点	最終論文（1月）								フィールドノート			
	A 要旨	B 研究意義	C 調査方法・内容	D 分析考察	E 結論	F 課題理解の深化	G 体裁・文体	合計	①考察の深化	②研究遂行	③外部連携	④メタ認知
最高水準	6	6	6	6	6	6	6	42	6	6	6	6
優秀者	4.67	4.50	4.17	3.89	3.83	4.06	4.72	29.83	2.28	2.17	2.39	2.06
それ以外	3.07	3.18	2.86	2.68	2.61	3.18	3.64	21.21	1.89	1.04	1.50	1.50

〈分析2〉評価上昇群と下降群の比較

研究計画書と最終論文・フィールドノートの評価を比べ、研究のプロセスにおいて評価が上昇していったチーム 12 と逆に下降傾向であったチーム 12 を比較した（下図【3】【4】）。計画書段階ではさほど差のなかった両群が、経過報告書段階で大きく差を広げていく様子が見てとれるが、なかでも研究経過報告書の「①メタ認知」「②分析・考察」「④外部連携」で差が大きい。とりわけ「④外部連携」は差が 3.16 もあるのが目を引く。生徒たちが課題研究の水準を上げていくためには、研究をメタ認知する力や分析・考察する力とともに、外部の専門家や問題の当事者とつながる組織力・対話力が重要であることが分かる。ISS チャレンジの一環として「外部評価会」を設けたのもその趣旨による。

【3】評価上昇群と下降群の比較（研究計画書・研究経過報告書段階）

観点	研究計画書（5月）						研究経過報告書（10月）					
	A 研究目的	B 先行研究	C 研究方法	D 実現可能性	E 内容妥当性	合計	①メタ認知	②分析考察	③研究遂行	④外部連携	⑤調査	合計
最高水準	6	6	6	6	6	30	6	6	6	6	6	30
上昇群	4.47	3.80	3.60	3.67	3.47	19.00	4.80	4.27	4.33	4.93	4.53	22.87
下降群	4.06	3.33	3.11	3.44	3.72	17.67	3.22	2.67	3.11	1.78	3.00	13.78

【4】評価上昇群と下降群の比較（最終論文・フィールドノート）

観点	最終論文（1月）								フィールドノート			
	A 要旨	B 研究意義	C 調査方法・内容	D 分析考察	E 結論	F 課題理解の深化	G 体裁・文体	合計	①考察の深化	②研究遂行	③外部連携	④メタ認知
最高水準	6	6	6	6	6	6	6	42	6	6	6	6
上昇群	4.53	4.93	4.20	4.27	4.07	4.27	4.73	31.00	2.47	2.40	2.80	2.20
下降群	3.06	2.89	2.61	2.33	2.39	2.89	3.50	19.67	1.72	0.83	1.11	1.50

〈分析3〉質的変容のケース分析

以上数値での評価を分析してきたが、最後に一つのケースについて質的な変容を具体的に追ってみたい。「自らの主張発信型」であった自らの課題研究を「客観的な統計分析による考察発信型」へと軌道修正していったケースである。この生徒は前年度より研究テーマを継続している6年男子生徒で、国会での不規則発言（いわゆる「野次」）を取り上げて昨年度はその背景をデータ分析により明らかにしたことで、今年度は当初「国会審議の充実化を目的に不規則発言の抑制策を提案する」ことを研究のゴールとしていた。これに対し、「研究計画書」への評価としてメンターからは「6年生でもあり、SGHの課題研究としては区切りをつける必要がある。ゆえに実現できなかったことについても十分に分析し、なぜできないのかということを確認にすることが大学での研究につながる」、他の教員からは「メディアの影響を挙げているが、これ以外の外的な要因をすべて想定してみる必要がある」というコメントをもらっていた。

このようなコメントを受けて生徒は不規則発言に関する統計調査をより精緻にするかたちで研究を進めた。10月に提出した「研究経過報告書」では以下のように述べている。

不規則発言に関する分析という意味では、研究は進んでいると言える。昨年行った研究成果について行った新たな解釈と、新たに得た統計をもとに、昨年よりも実現可能な形で抑制策を提案することができている。一方で、当初計画案で行う予定だった、メディアに関する具体的な統計の算出については、手法の検討が不十分で、行うことができなかった。不規則発言が行われている会議のほとんどが国会中継の対象になっているということで、メディアの影響について言及することはできたが、当初の計画に比べれば不十分だと言わざるを得ない。

このように、自らの研究の到達点と限界をその理由まで含めてメタ認知できているのは、メンターからのコメント等による研究態度の変容であると考えられる。さらにこの生徒は9月の外部評価会で社会学の専門家から指導を受けることができ、「切り口が大変面白い研究だが、政治のからむ非常にデリケートなテーマである。データの解釈に中立性が担保される必要がある」「データはいくつかの解釈が可能なので、自分の解釈とは異なる解釈を想定して、自分の解釈の妥当性を客観的に検討する必要がある」といったアドバイスを受けた。6年生で大学受験の準備を進めながらの課題研究であったが、この後限られた時間の中で修正を進めて、最終論文と研究ポスターを提出した。外部評価会を受けた後の本人の振り返りは以下の通りである。

統計データについて、政治的中立性に欠けるのではないかとの指摘があった。個人的には恣意的にデータを操作したつもりはないが、客観的に見ればそのように見えてしまうこともあるのかもしれない。ゆえに今回は与野党の議席差という形で指標をとることで、中立性を担保した。

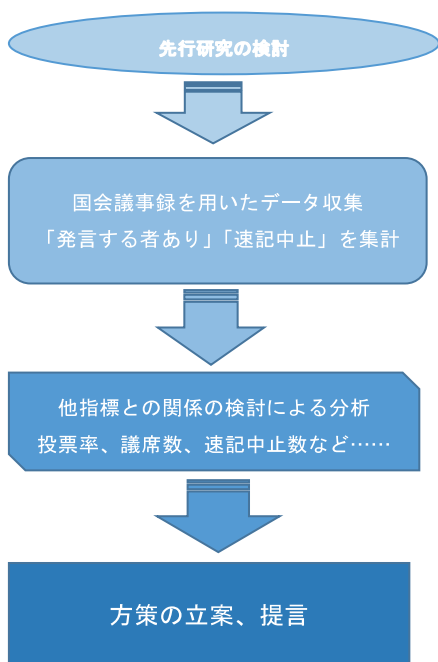
この生徒が9月に提出した研究ポスターと12月に提出した最終ポスターを次ページに示す（<図1 一次提出ポスター> <図2 最終提出ポスター>）。単に不規則発言回数の推移から主張を導き出していた9月段階に対して、12月段階では「選挙制度改革」「投票率低下」「与野党の議席数」「国会中継」といった要素との相関を自分でグラフ化し考察している。高校生の課題研究が陥りがちな「データの恣意的な解釈」による「自らの主張発信型」から一歩も二歩も抜け出すことができたのは、当該生徒の大学以降での学び・研究活動に大きな成果であったと考える。私たち教員にとっても、生徒の課題研究を指導していくにあたって示唆の多いケースであった。

続・不規則発言から考える国会議論のあり方



研究の背景：民主主義国家日本において、国会は言わずと知れた国権の最高機関であり、そこで行われる議論はこの国の行く末を決める重要なものである。しかし現状、本当に国会では建設的な議論が行われているだろうか。国会中継を見ると、政策課題を巡る議論は飛び交うやじに遮られ、議事が中断する事態も見受けられる。この状況では、建設的議論など望むべくもないだろう。本研究は、国会議論における不規則発言を分析し、最終的にはやじ抑制の方策を講じることで、国会議論の在り方の改善を目的とするものである。

研究の方法：



昨年度研究より：

- 分析①…野党議席数の大小と不規則発言数の相関
- ・野党議席が少なければ少ないほど、不規則発言数は大。
⇒存在感の演出
- 分析②…投票率と不規則発言数の相関
- ・投票率が小さければ小さいほど、不規則発言数は大。
⇒競争率の減少による議員の質の低下

今年度研究・中間成果

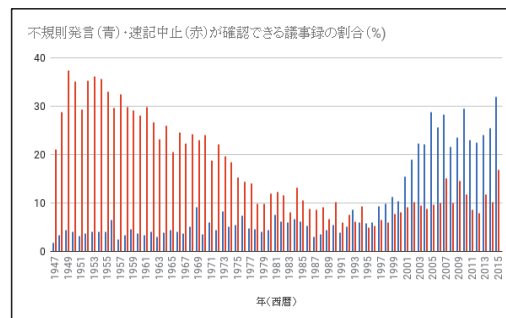


図1. 不規則発言・速記中止の推移

現在の仮説：

- ・議長の積極性が不規則発言に影響しているなら、なぜ議長は消極的になるのか
⇒議長は議員のうちから選ばれる
…身内意識？
…事前審査制度の導入によって党内の意見一致が図られる
⇒不規則発言の制止は、党の意志に反する？

- ・国会会議録検索システム (<http://kokkai.ndl.go.jp/>) からやじ、速記中止の見られる議事録数を抽出した。
- ・不規則発言が確認された議事録が全体に占める割合(青)は、速記中止が行われた割合(赤)と対照的な形で推移している。
⇒議長が積極的にやじを制し、議事の進行を行っていた初期と異なり、近年は速記中止の行われる割合が少なくなっている。
⇒議長の積極性が、やじの数に影響している？

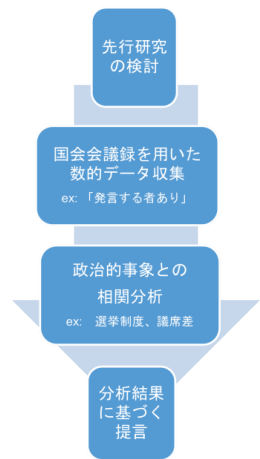
大山礼子. 『日本の国会』. 岩波書店 (岩波新書). 2011年.

木下健. 過去20年間の衆参予算委員会における与野党対立構造の分析. 同志社政策科学研究. 14(2), P79-92. 同志社大学出版会.

続・不規則発言から考える国会議論のあり方

研究の目的：国会議論にみられる議事を妨害する不規則発言について、抑制策を提案し、国会議論のあり方をより良いものにしていく。

研究の方法：



分析①：選挙制度改革と不規則発言の増加



図1. やじが行われた会議の占める割合の推移
・やじが行われた会議数の増加 (1990年代後半)

⇒小選挙区比例代表制の導入

- ・二大政党制の傾向を強める
- ・政党間の対立の激化

↓
不規則発言の増加につながった

分析②：投票率低下と不規則発言の増加

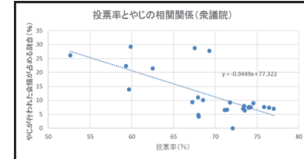


図2. 投票率とやじの相関関係 (衆議院)

- ・投票率とやじには負の相関関係がみられる

⇒組織票の影響力増大による政党間対立の激化

- ・投票率が低下すると、無党派層不在のもと、票が分散しづらくなる。

↓
対立政党を攻撃する手段としての不規則発言

分析③：与野党の議席差と不規則発言の増加

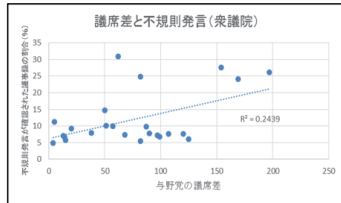


図3. 与野党の議席差と不規則発言の相関 (衆議院)

- ・不規則発言と与野党の議席差…正の相関 (衆議院)

⇒議席差の拡大による政党間対立の激化

- ・少数派の野党を抑え込もうとする与党、自分たちの存在感を示す野党の思惑

↓
不規則発言の増加

分析④：国会中継と不規則発言

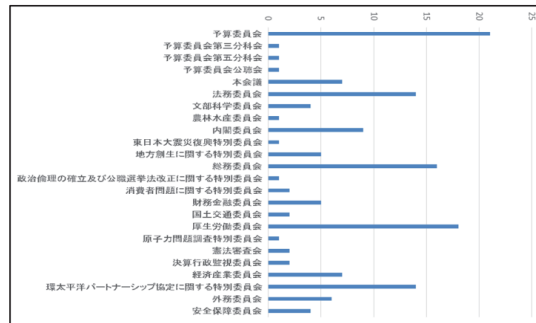


図4. 衆院委員会別不規則発言の見られた会議数

- ・委員会別に不規則発言の行われた会議数を見ると、予算委員会のような国会中継が頻繁に行われる委員会や、TPPなど時事の問題を審議する委員会に多い

⇒世間的な注目度の大きい委員会で行われている

結論：

- ・不規則発言は、96年の小選挙区比例代表制導入、投票率の低下、与野党の議席差、そして国会中継の有無によって影響される。

- ・世間の目を利用して自らの存在感を誇示しようとする少数政党、少数政党に対し有利であることを印象付けようとする与党の思惑が働いている

⇒国会中継から不規則発言を含む雑音音を削除、不規則発言の効果を減らすとともに、議論内容が有権者に伝わりやすくなる。

4.3 進路と SGH の関わり

4.3.1 6 年生アンケート集計結果と分析

SGH 課題研究を行った生徒から東京大学推薦入試（文科 I 類・法学部）での合格者 2 名（男女各 1 名）。両者とも ISS チャレンジにてセミファイナリストになった経験あり。

直近 2 年間の ISS チャレンジのファイナリスト・セミファイナリスト経験者の 8 割は特別入試で難関大学の合格を得ている。

入試において SGH の活動実績を使用したと答えた生徒は 14 名。全回答者の 10.3 パーセント。人数としては前回とほぼ同様。進路を考えるに際して SGH の活動が有効であると考えている生徒が回答者の 87 パーセント。大学入試出願や受験に際して SGH の活動による影響や効果があると答えた生徒が回答者の 68 パーセント（前年比 6 パーセント増）。

（1）目的

SGH 研究開発事業を通して、生徒がどのような意識の変容を見せるか、また課題研究の取り組みや SGH に関連する活動がどの程度進路選択や進路決定に影響を及ぼすかを調査・分析する。

（2）実施概要

調査時期 2018 年 1 月上旬

対象 本校 6 年生（回収数 126 名/学年在籍数 135 名）

（3）分析

昨年度と同様最終学年である 6 年生（有効回答数 126 名）に進路との関わりについてアンケートを行った。アンケートの項目と回答数は次ページ以降に示した通りである。比較対象として 2016 年度分の回答状況も掲載する。

項目①の SGH の活動実績を使用したという生徒 14 名は昨年度より 1 名少ないが、推薦入試や A O 入試といった特別入試枠で受験し多くの生徒が合格となっている。この中には東京大学文科 I 類（法学部）の推薦合格者 2 名も含まれる。SSH での活動実績利用が今年度も 3 名にとどまったのに対してその約 5 倍という割合は校内としては多いと言ってよいであろう。今年度も学年全体の約 1 割は確実に「SGH」の成果を利用して受験することができたということになる。

昨年度は回収数が 87 名であったが、今年度回収数が 126 名に増えたとしても項目①の回答に大きな変化が見られない。つまり全体的傾向として継続的に学年の約 1 割が SGH の成果を大学入試に活用し合格するということが予測される。

ここで昨年度と今年度の ISS チャレンジ（校内の課題研究コンペティション）の最終選考に残ったファイナリスト（上位 4 組）・セミファイナリスト（ファイナリストに次ぐ 12 組～14 組）の傾向を見ておきたい。今年度の 6 年生のうち、昨年度・今年度の ISS チャレンジ参加生徒でファイナリスト・セミファイナリストになった経験を持つのは、10 組 15 名である。このうち、2018 年度現在で特別入試・海外入試を含めてすでに合格し進学先が決まっている生徒は 12 名である。

合格先・進学先（予定）としては、東京大学・筑波大学・首都大学東京・早稲田大学・慶應義塾大学・上智大学・立教大学・Swarthmore 大学（米国）・The University of Queensland（豪州）などが挙げられる。15 名全員が SGH の成果を活用して合格を決めたわけではないが、全体として課題研究における上位層はその成果を活用して難関大学と言われる大学への合格・進学をするという傾向が見受けられる。

次に注目したいのは項目③における回答である。入試に実績を使ったと答えた生徒のうち 11 名は課題研究の受賞を利用したと答えている。課題研究の成果自体を活用した・課題研究の成果を発表したという回答と合わせ 31 という数は昨年度の同項目の合計数 23 を上回る。本校の生徒は昨年度も同様の傾向を示しているが、こうした生徒たちの課題研究は何らかの形で大学での研究に応用さ

れる基礎研究としての側面を持ち得ていると言えるだろう。

さらに注目すべきは「外国語学習」への意識である。別章のアンケート結果にもその傾向は見られるが、SGH 研究開発実施後の自分自身の変化として生徒が挙げるのは「外国語学習の重要性」である。一方で今回の6年生の調査においても項目④において、外国語の資格を活用して入試の臨んだ生徒が74人おり、資格の活用の割合が高いことがうかがえる。

SSH・SGHの活動実績と進路の関係についてのアンケート(87名) 2016年度

注)④以降は①でSSHやSGHの活動実績を「4使わなかった」と答えた人も含めて回答してもらった

Question	Answers	人(のべ)
① 今年度の入試においてSSH・SGHの活動実績を活用しましたか？	1SSHの実績を使った	3
	2SGHの実績を使った	15
	3両方の実績を使った	1
	4使わなかった	68
② ①1-3 使った人はどのような入試で活用しましたか？(複数回答可)	1推薦入試(公募制・指定校)	6
	2自己推薦入試・AO入試	11
	3帰国生入試	3
	4国内のその他の入試	1
	5海外大学の入試	3
	6その他	0
③ ①1-3 使った人はどのようなことを活用しましたか？(複数回答可)	1課題研究の成果	13
	2課題研究を外で発表したこと	4
	3課題研究で受賞したこと	6
	4国内研修の経験	4
	5海外研修の経験	5
	6その他 (論文1不明1)	2
④ SSHやSGHの活動実績以外で、今年度の入試において活用した実績はどのようなものがありますか？(複数回答可)	1外国語の資格	42
	2外部での活動実績(SSH・SGHに関連しない活動)	21
	3習い事の成果	10
	4コンテストの表彰実績(SSH・SGHに関連しない活動)	14
	5その他 (部活での活動成果3 不明3)	6
	6使ったものはない	39
⑤ SSHやSGHの活動などを通して、進路に対する考えに変化や影響はありましたか？程度にかかわらず、あったか・なかったかで回答願います。	1あった	23
	2なかった	63
⑥ ⑤の質問で、「1あった」と回答した人にお尋ねします。どのような変化や影響がありましたか？(複数回答可)	1進路を考え直した	3
	2進路が定まった	9
	3進路に関する理解が深まったり、広がったりした	16
	4進路に関する迷いが強くなった	0
	5国際関係や海外進学への興味や意志を持つようになった	6
	6外国語(英語含む)能力の重要性を実感した	3
	7その他	0
⑦ 大学入試を含む進路を考えるに際して、SSHやSGHの活動は有効だと思いますか？	1有効だと思う	21
	2有効な部分もある	51
	3有効ではないと思う	15
⑧ 大学入試の出願・受験においてSSHやSGHの活動実績は影響や効果があるものだと思いますか？実際に使えるものかどうか、実感としてどうであったかを回答して下さい。合否は問いません。	1影響や効果がある	53
	2影響や効果はない	25
	3その他 (私は使わなかったのですがわからないが効果のある場所もあると思う / 進路による / わからない / あまりない。賞をもらったりすればあるのかも / 学部・大学による / 極めて良い成績を収めれば良い影響があるが、中途半端なレベルで研究しても時間が少し無駄になるだけだと思う)	6

(図1 進路とSGHの関わりー6年生アンケート集計結果 2016年度5回生)

SSH・SGHの活動実績と進路の関係についてのアンケート(126名) 2017年度

注)④以降は①でSSHやSGHの活動実績を「4使わなかった」と答えた人も含めて回答してもらった

Question	Answers	人(のべ)
① 今年度の入試においてSSH・SGHの活動実績を活用しましたか？	1 SSHの実績を使った	3
	2 SGHの実績を使った	14
	3 両方の実績を使った	0
	4 使わなかった	109
② ①1-3 使った人はどのような入試で活用しましたか？ (複数回答可)	1 推薦入試(公募制・指定校)	4
	2 自己推薦入試・AO入試	11
	3 帰国生入試	1
	4 国内のその他の入試	2
	5 海外大学の入試	3
	6 その他(IB入試 1 高大接続 1)	2
③ ①1-3 使った人はどのようなことを活用しましたか？ (複数回答可)	1 課題研究の成果	13
	2 課題研究を外部で発表したこと	5
	3 課題研究で受賞したこと	11
	4 国内研修の経験	2
	5 海外研修の経験	4
	6 その他(グローバルカフェや来校者との交流1)	1
④ SSHやSGHの活動実績以外で、今年度の入試において活用した実績はどのようなものがありますか？ (複数回答可)	1 外国語の資格	74
	2 外部での活動実績(SSH・SGHに関連しない活動)	45
	3 習い事の成果	19
	4 コンテストの表彰実績(SSH・SGHに関連しない活動)	25
	5 その他(部活6 IBDP2 社会貢献活動1 グローバルカフェ1 インターン1 これまでの研究や作品1 不明1)	13
	6 使ったものはない	41
⑤ SSHやSGHの活動などを通して、進路に対する考えに変化や影響はありましたか？程度にかかわらず、あったか・なかったかで回答願います。	1 あった	35
	2 なかった	90
⑥ ⑤の質問で、「1あった」と回答した人にお尋ねします。どのような変化や影響がありましたか？ (複数回答可)	1 進路を考え直した	7
	2 進路が定まった	10
	3 進路に関する理解が深まったり、広がったりした	20
	4 進路に関する迷いが強くなった	4
	5 国際関係や海外進学への興味や意志を持つようになった	6
	6 外国語(英語含む)能力の重要性を実感した	8
	7 その他(志望理由の内容1 視野が広まった1 不明1)	3
⑦ 大学入試を含む進路を考えるに際して、SSHやSGHの活動は有効だと思いますか？	1 有効だと思う	27
	2 有効な部分もある	83
	3 有効ではないと思う	16
⑧ 大学入試の出願・受験においてSSHやSGHの活動実績は影響や効果があるものだと思いますか？実際に使えるものかどうか、実感としてどうであったかを回答して下さい。合否は問いません。	1 影響や効果がある	86
	2 影響や効果はない	27
	3 その他 受験校による 1/わからない 6/ある人となない人がいる 1/ 外部発表をやるほど有利になる 1/一般入試の障害 2/高い実績や成果は使えると思う。面接で内容を聞かれたので大学側は興味があると思う 1	12

(図2 進路とSGHの関わりー6年生アンケート集計結果 2017年度6回生)

4.3.2

SGH で研究をした生徒による報告—SGH 課題研究と進路

東京大学 文科 I 類 2018 年度入学生

SGH を通し本当に様々な経験を積むことができましたが、特に役立ったのは将来の方向性を決定する時でした。

1 年間のスイス交換留学からの帰国後、進路に迷っている時、興味を持っていた言語について SGH で研究することにしました。初めは社会言語学に関して知識が全くなく、研究の方向性を決定するのに時間がかかりました。しかし、先生方に相談し、相談会で先輩と話をすることで研究内容が具体化され、その後の本研究を円滑に進めることができました。研究では、ダイグロシアと呼ばれる多言語併用社会を比較し、多言語併用社会において言語状況がどのように発展して行くのかを考察しました。研究自体は短期間で終わってしまいましたが、研究手法や論文執筆方法は次年度に数多くの反省点を残しました。特に、帰納的な研究手法については、言語状況が似ている地域を探し比較する必要があったのに、変化を続ける社会を正確に捉えることができなかつたため、比較が曖昧になってしまった、という反省がありました。

5 年生の 3 月に SGH 研修で訪れたフィリピンでは、研究対象であった多言語併用社会を実際に体験することができました。多くの教育機関を訪問することになったので、多言語併用社会を教育という見地から考察する機会となりました。特に、訪問した現地高校・大学で説明を受けた新しい母語教育システムに興味を持ち、帰国後に調査を行った結果、マイノリティー言語使用者と主言語使用者の間に教育格差が生まれる可能性があると考えようになりました。ここから、次年度の研究では言語的マイノリティーを政治的にどのように取り扱うべきか、ということを取り上げようと考えました。前年度の反省を踏まえ、研究手法を 180 度転換し、演繹的に「言語」と「政治」の関係を推論するところから開始しました。研究手法が改善されたのかは不明ですが、一般的な比較・帰納法といった推論と異なる研究手法が実践できました。

6 年次で始めた「言語」を政治的・法的観点から考察する研究は、進学先に法学部を選択する際の直接的なきっかけとなり、推薦入試にも直結しました。

SGH は、研究活動や研修を通し、生徒に新たな何かを志向するきっかけを与えてくれます。また、中等教育学校のように数年間を通し研究に取り組むことのできる環境であれば、年々研究の手法も上達し、将来の方向性を決定する決め手にもなり得るものだと思います。

4.4 教員の意識と評価

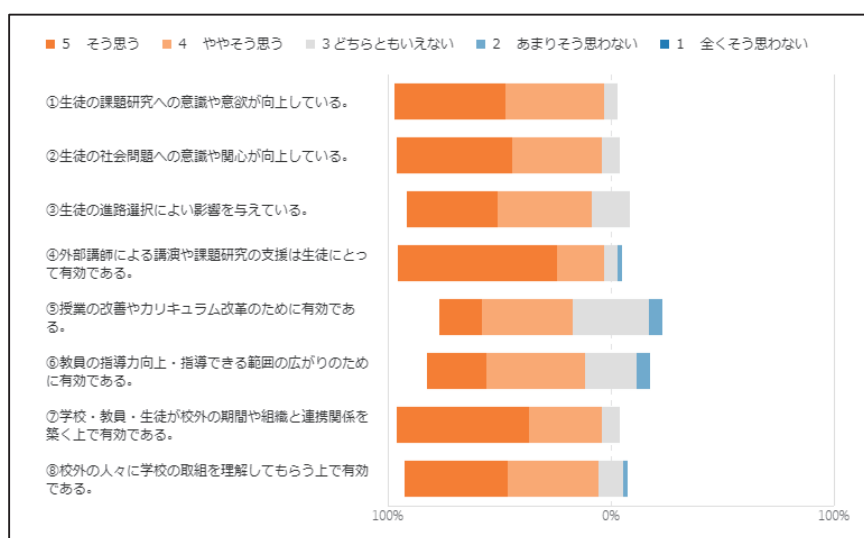
- ・ 回答数 n=52 (前年度回答数 n=45)
- ・ 全体的な回答の傾向は変化なし。
- ・ 生徒にとっての SGH 事業に意義や価値を見出しているものの、授業改善やカリキュラム改善に対する SGH 事業の意義や価値を見いだせていない感覚が残る。

今年度も教員向けにもアンケートを実施した。4年・5年の生徒向け同様に Office365 (マイクロソフト) の「Forms」を使用し、web 上で回答を回収した。質問項目とともに集計結果を以下に掲げる。なお質問 1・2 に関しては、各項目を以下のように 5 段階で評価している。

5 : そう思う 4 : ややそう思う 3 : どちらともいえない 2 : あまりそう思わない 1 : 全くそう思わない

質問 1 SGH 事業を行うことの効果について (n=51)

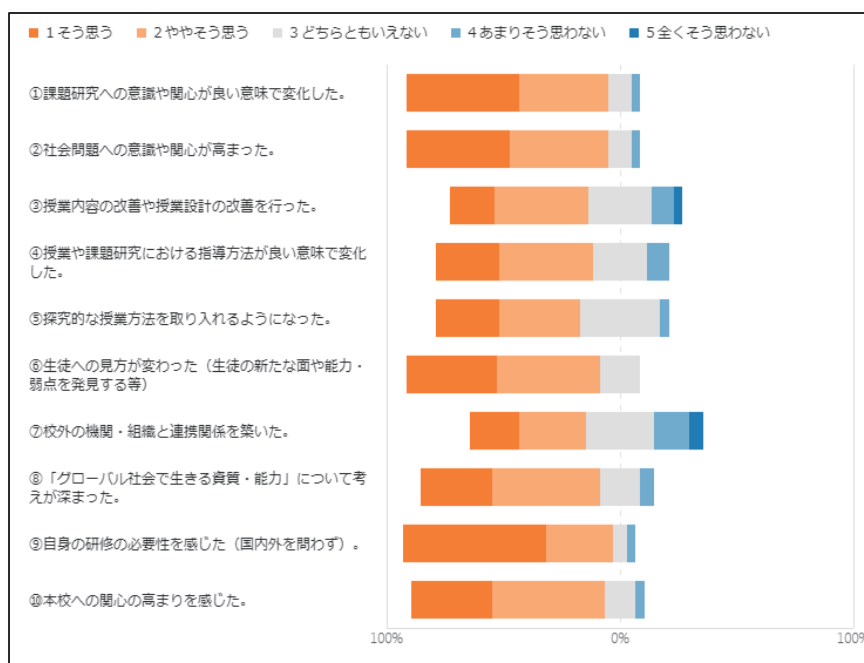
<分析> 生徒へのよい影響を感じているのは前年度同様 (約 95%)。教員への有効な効果を感じて



ているのは 70%。SGH の事業が生徒により影響を与えていると考える教員はほぼ全員と言える。しかし指導する側の教員についてはまだ負担感の強さが払拭できず、授業やカリキュラム上の改善に本当に役立っているとはいえないと感じている教員が 40% 近くいる。

(左図上：質問 1 の回答傾向)

(左図下：質問 2 の回答傾向)



質問 2 SGH 事業を通じた教員自身の変化・変容 (n=51)

<分析> 全体的な傾向は前年度から変わらない。ただし、自由記述欄には次のようなコメントがあり、積極的な意見が徐々に増えていることが分かる。

意見 1 : 評価についての理解が深まった。他校のさまざまな実践から知見

を広げた。

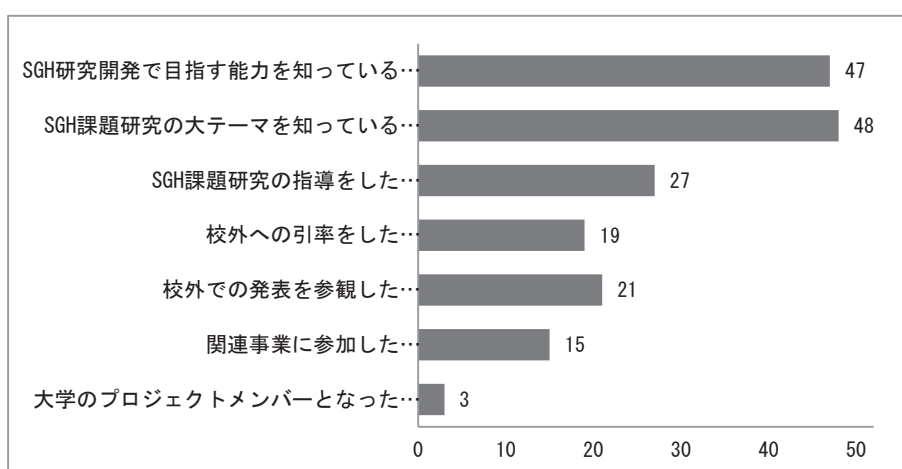
意見 2：生徒のおこなう研究の、プロセスから結果までを一通り見ることで、問題発見→課題解決という考え方が以前よりも円滑におこなえるようになった。また、部活動や校外での活動の運営面においても良い影響があった。

ただし、「質問 3 についてはもともと高いレベルにあるので変容を測る項目でないものが多すぎる」という意見もあった。調査の妥当性を測るための項目設定を今後検討したい。

質問 3 課題研究による ATL スキルの習得（生徒）について（前掲）

質問 3 は課題研究を通して生徒がどのようなスキルを身につけたと思われるかについての調査である。この回答に関しては前掲の生徒との比較を参照されたい。

質問 4 これまでの SGH 事業との関わりについて（n=51）



<分析>質問 4・5 ともに大きな傾向の変化はない。本校は国際バカロレアの MYP や DP の研修のために各都県の教員を 1 年～2 年の範囲で受け入れているが、その教員を含めても前年度との回答傾向に変化はなかった。校外での発表を参観したり、生徒の引率をした

りした教員は多少増えている。

質問 5 外国語科教員・IM（イマージョン）担当教員の意識

SGH の大テーマや課題研究に関する内容を授業で扱った。	7
スピーチ・ディスカッション・プレゼンテーション・エッセイライティングなどの学習方法を取り入れた。	14
SGH 事業に取り組むことによって、外国語運用能力の伸長が見て取れる。	4

注目すべきなのは、3 点目の回答である。外国語科の教員や IM 授業担当者は SGH 事業による外国語運用能力の伸長をあまり感じていないようだが、生徒の方は SGH の研究や活動を通して外国語（特に英語）の学習の強化の必要性を強く意識している。つまり、現状では生徒は外国語学習の強化の必要性を強く感じてはいるものの、事業自体を通してはその能力を十分に伸長できているとは限らず、むしろ授業や自主的な学習に依っている状況にあるということが示される。